



バイリンガル子育ての ヒント

vol.6

「日本語の一貫性を貫く」



1. 英語の宿題を手伝わないと行けない場合。この場合も子供のそして自分の語彙を増やす絶好の機会と捉え、やはり100%日本語で手伝います。英語で書かれた

「子供は親の鏡」で、親が「100%一貫して」日本語で子供に話しかける、OPOL (One Person One Language) というバイリンガル教育のストラテジーをご紹介します。高いレベルのバイリンガルに育てるには、99%日本語ではだめなのです。親の1%の英語が子供に英語でもいいんだというメッセージを与えてしまうからです。「100%一貫して日本語で」と言うと、「でもこんな場合は？」とよく聞かれます。今回はよくある2つの場合とその対処法をご紹介します。

2. 英語がわからない人の前で話さないと行けない場合。100%いつも日本語で話す事の必要性を確信していれば、ほとんどの場合は問題ではないことがわかるはずで

宿題の指示は黙読してそれを日本語にして話します。算数の図形の問題であれば、「この長方形の面積と周辺の長さを求めよって書いてあるよね。」という風にです。そこで子供が書いた英語が間違っていたとします。これも日本語で「ここ、PerimeterじゃなくてPerimeterにしないとダメだね。」という様に指摘します。辞書を引きながらでも構わないのでどんな科目でもあくまで日本語で手伝うのです。こうすることで、一貫性を保つことができ日本語の語彙を増やすこともできます。

す。お店で見ず知らずの店員さんに気を遣う必要はありません。問題は日本語が全くわからない家族や友人から自分たちの前では英語で話して欲しいと言われた場合です。その場合は、なぜ日本語で話さないといけないかを丁寧に説明しあくまで日本語で通ずしかりません。自分にとって子供をバイリンガルに育てる事がどんなに大切か、自分が希望するレベルの日本語力を身につけてもらうためにOPOLというストラテジーを使っていること、そのため例外なしに100%日本語で話さなければならぬことを話します。何事も先手必勝、できれば子供が小さい頃から必要な人に理解を求めておくことをお勧めします。

宮崎 直子

津田塾大学英文科卒、イリノイ大学アジア研究科(日本語教育、言語学専攻)修士課程卒。ことば+カルチャー(kotobaandculture.com)代表。

